



埼玉県農協農政対策委員会委員長賞

ぼくのこめづくり

さいたま市立大久保小学校 三年

杉森 健成すきもり けんせい

「おじさん、その苗ちょうだい。」

ぼくのその一言から、ぼくのお米との短い夏がはじまった。きんきゅうじたいせんげんの一回目、学校も休校になり気分転換で行くのが近所の田んぼだった。田植えをしていたおじさんに、ぼくは何となく声をかけたのだ。

「おいしい米ができるといいな。むずかしいぞ」
そういっておじさんは大切ないねの苗を分けてくれた。それから発ぼうスチロールに田んぼの土を入れて、つかまえてきたおたまじゃくしも放した。おたまじゃくしがいたぼうが田んぼらしい。

小さかった苗が毎日少しずつ大きくなるのがうれしかった。大きなおにぎりを作って、苗をくれ

たおじさんに届け、ぼくはカレーライスにして食べるのが楽しみだった。9月にしゅうかくをむかえた。できたお米は70グラムほど。だっこくやもみすりで落ちた一つぶでさえもつたいなかった。

ほんのすこしとれたげん米をお母さんが白米にまぜてたいてくれた。げん米はやさしい黄色で、小さなおにぎりは、やさしい味がした。

「大変だったね。でもおいしいね。」
と、家族で笑った。

あたり前に毎日食べていたお米は、ごはん茶わん一杯作るのだって大変だった。おじさんに大きなおにぎりをとどけることもできなかった。でも、ぼくは、一つぶ一つぶの大変さと大切さ、そこにだれかの思いがあることはわかった。

大すきなカレーライスをたべるとき、ぼくはしあわせだ。お米があるから、カレーもおいしい。ぼくの夏の米づくりは、おいしさとやさしさと大変さがつまった時間だった。